

携帯メールを利用した展望的記憶研究

想起時間帯と想起タイミング指定方法の効果¹⁾

芳賀 繁

(立教大学現代心理学部)

Key words: prospective memory, mobile phone, time of day

目 的

展望的記憶の失敗は、忘れ物をする、待ち合わせをすっぽかすなどの日常的なエラーだけでなく、人命に関わる事故の要因ともなり得る。しかし、従来の展望的記憶の研究は実験室の中の人工的課題が使われることが多く、生態学的妥当性が確保されているとは言い難い。本研究では、学生のほとんどが常時持ち歩いている携帯電話を使用することで、日常生活の中でより自然な状況に近い展望的記憶実験の可能性を探った。

今回はとくに、時間帯が及ぼす影響について、渡辺・川口(2000)が確認した“時系列のU字型現象”を検証する。そして、日常場面における時間ベース課題(時刻条件)と事象ベース課題(イベント条件)を比較することも試みる。

方 法

実験デザイン 時間帯の要因(朝・昼・夜)と想起タイミング指定方法の要因(時刻条件・イベント条件)を独立変数とする2要因被験者内計画を採用した。時間帯は時刻を基準に分け、8~11時を朝、13~16時を昼、19~22時を夜とした。時刻条件では課題を実行する時刻を指定し、イベント条件では時刻の代わりに日常的に誰もが行う行動を指定した(表1)。

実験参加者 都内私立大学に通う学生計25名(男性8名・女性17名)で、平均年齢は20.5歳(19~22歳)であった。

課題内容 指定された時刻もしくはタイミングに、指定された平仮名1文字を携帯電話でメールを送るというものであった。実験期間は一人につき6日間であり、一日に1つの課題が課せられた。実験日前日の23時に課題が書かれたメールを実験者が配信した。実験条件と平仮名の種類はその都度ランダムに割り当てられた。

手続き 実験参加者は課題のメールを読んだら受信確認のため空メールで返信し、すぐに課題のメールを削除するよう教示された。

さらに実験参加者は一日の課題が終了後、課題を実行すべき時刻と思い出した時刻の自分の行動、同伴者の有無、課題を思い出した要因などについて「内省報告表」に記入し、すべての実験が終了した後提出した。

表1 実験条件

	時刻	イベント
朝	8:00	起きたら
	9:00	家を出たら
	10:00	大学に着いたら
	11:00	2限が始まる前
昼	13:00	昼食後
	14:00	3限後
	15:00	大学を出たら
	16:00	トイレに入ったら
夜	19:00	帰宅したら
	20:00	夕食後
	21:00	歯磨きをしたら
	22:00	寝る前

結 果

時刻条件では指定された時刻前後5分以内にメールを送信することができた場合を想起成功とした。イベント条件の場合は実験参加者の内省報告から想起成功・失敗を判断した。

時間帯別の想起成功率に有意差は無かった。一方、時刻条件の想起成功率は30.0%、イベント条件の成功率は68.0%であり、この差は統計的に有意であった($F(1,24)=18.615, p<.001$)。

各時間帯の想起成功率を図1に示す。時間帯と実験条件の間には交互作用があった($F(2,48)=4.460, p<.05$)。各時間帯でイベント条件の方が時刻条件よりも想起成功率が高く、夜には有意差が見られ($F(1,24)=42.667, p<.001$)、朝の差も有意であった($F(1,20)=4.477, p<.05$)。条件別に分析をしたところ時刻条件でのみ有意差があった($F(2,670), p<.05$)。

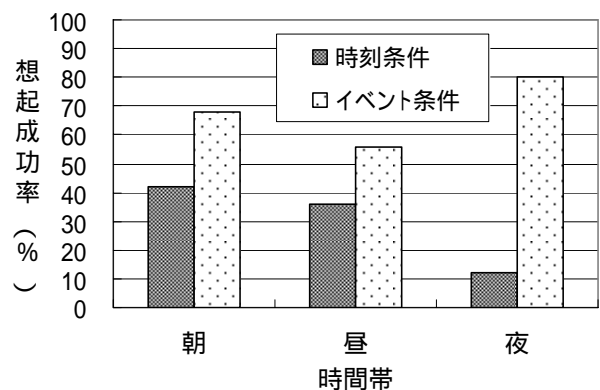


図1 各時間帯における実験条件別成功率

考 察

時刻条件で夜の時間帯において成績が悪かったのは、朝・昼に比べ保持時間が長くなったためではないと考える。なぜならイベント条件ではかえって他の時間帯より夜の方が成績がよいからである。授業がある朝、昼に比べ、夜はサークル活動、飲み会、アルバイト等で時刻を意識しなくなるために、想起のタイミングを逸することが多かったのではないかと推測される。

どの時間帯においてもイベント条件の方が時刻条件より有意に成功率が高かった理由としては、時刻条件は指定された時刻に何かをしている可能性があるが、イベント条件は必ず行動の区切りであり課題を意識しやすかったためではないかと考えられる。また、有意な差ではなかったがイベント条件にU字型現象の傾向が見られた。

本研究は携帯電話を用いることで、日常生活の中で比較的長期間の実験と比較的長時間の保持時間設定が可能となり、これからの展望的記憶研究に新しい実験方法を提案することができたと考えよう。

引用文献

渡辺はま・川口 潤 2000 予定の記憶における時間的特性
心理学研究, 71, 113-121.

(HAGA Shigeru)

¹⁾ 本研究で報告される実験は、2007年度に立教大学文学部心理学科の伊東真友子さんと後藤はるかさんが卒業研究として行ったものである。